



『夷酋列像』の虚実と背景 —イコトイの立ち絵を中心に—

北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授 蓑島 栄紀 (みのしま・ひでき)

|| 1 || クナシリ・メナシの戦い

1789 (寛政元) 年5月、クナシリ場所 (国後島) を中心として、メナシ地方 (道東) のアイヌが集団決起し、現地の和人71人を殺害した。報を得た松前藩は軍勢を派遣し、幕府も備えを見せるが、クナシリのツキノエ、アツケシ (厚岸) のイコトイなどのアイヌの指導者たちは、政治的判断から松前藩に協力的な姿勢をとり、事態の收拾に動いた。その結果、大規模な戦闘は回避されたが、決起したアイヌのうち37人が処刑された。アイヌ民族による和人への最後の組織的な戦いとして知られる「クナシリ・メナシの戦い」である。その要因として、松前藩へのばく大な貸付金を回収しようとする場所請負商人の飛騨屋久兵衛が、漁場労働にアイヌを酷使したこと、現地での和人によるさまざまな暴虐行為があったことが知られている (『寛政蝦夷乱取調日記』など)。

|| 2 || 『夷酋列像』に描かれた人たち

松前藩の家老でもあった蠣崎波響の『夷酋列像』(1790年制作) は、このとき和平に動いた実在のアイヌ有力首長たち12人を描いたものである。早くから精巧な名品として京都などで評判となり、光格天皇の天覧にも供された。多くの模写も制作され、12点からなる全容が知られるが、函館市中央図書館蔵の2点、ブザンソン美術考古博物館蔵の11点の2組は、波響による別系統の真筆と見られている。1枚1枚を実際に目にする、その意外な「小ささ」にもインパクトを受ける。五十嵐聡美は、「まるで畳一枚ほどの絵をA3に縮小したような凝縮された世界」と評している (五十嵐2003)。

ここには、アツケシのイコトイ、クナシリのツキノエ、その妻チキリアシカイ (イコトイの母だが、ツキノエとイコトイには血のつながりはない (川上2011)) の図を掲げた。1669 (寛文9) 年のシャクシャインの戦い後、松前藩のアイヌ支配は進展し、18世紀には場所請負制によって本州の商人たちが蝦夷地の各地に直接進出する。しかし、そのような状況下にも、道東にはより自立的なアイヌ

社会があった。18世紀前半の『蝦夷商賈聞書』には、クスリ (釧路)、アツケシなどのアイヌは「心悪シ」と表現され、松前藩の意のままにならないとされている。18世紀末の『東遊記』でも、「東の蝦夷は豪強なり」と評される。

こうしたなかで、若手の有力アイヌとして台頭したのがアツケシのイコトイであった。イコトイはエトロフ方面でも勢力を振るい、北千島のアイヌとも親族関係を結ぶなど、道東・千島のアイヌ社会に威名をとどろかせた。1786 (天明6) 年に田沼意次の命で蝦夷地を調査した佐藤玄六郎は、イコトイがエトロフを勢力下に置くことで、ロシアの南下をはばんでいると評価している (『蝦夷拾遺』)。一方、近藤重蔵はイコトイについて、奸智と暴力によってアイヌ社会で勢力を伸ばす「悪党」としている。毀誉褒貶、多面的な評価のあるイコトイであるが、その死後に編集された山崎半蔵の『華夷記抜書』や『毛夷東環記』では、イコトイは近藤重蔵に対して「蝦夷の主人」と自称したとされ、この時期におけるアイヌの民族世界の自立性を維持した功績があったとする (田端2005)。

さて、波響の描くイコトイは、西洋風の赤い外套をまとい、その下に龍文を刺繍した豪華な服を着ているが、足元は素足で、左手に長槍を持つ。エキゾチックで野性的、かつ勇壮な、「異容」と「威容」を兼ね備えた姿といえる。『夷酋列像』の背景にある構図や技法の連鎖については、春木晶子による論稿に詳しい (北海道博物館編2015)。

こうしたイコトイのいでたちには、当時の北東アジア世界におけるダイナミックな交流が反映していた。赤いコートはロシア製。当時、ロシア帝国はカムチャツカから北千島に南下し、先住民を駆使してラッコ皮を入手していた。実際にイコトイがロシア製のコートを持っていたかは定かでないが、1758 (宝暦8) 年にアツケシに派遣された松前藩士の湊覚之進が、エトロフの首長カツコロに会い、「赤人」(ロシア) に関する情報を得た際、カツコロは「猩々緋」(深紅) のコートを身にまとっていたという。また、その下の龍文をあしらった衣服は、清朝の役人の官服で、いわゆる「蝦夷錦」である。アイヌなど先住民の手を介し、中国から北回りで日本列島に渡来した絹製品であり、ア



【図】『夷酋列像』より左:イコトイ、中:ツキノエ、右:チキリアシカイ
左:函館市中央図書館蔵、中・右:ブザンソン美術考古博物館蔵

イヌが国際的な異文化交易の担い手であったことを象徴する産物としてよく知られる。

|| 3 || 『夷酋列像』を読み取る

ただし、波響の表現を事実としてそのまま受け取ることとはできない。一般に、当時の和人の手がけた「アイヌ絵」には、多くの誇張や虚構が散りばめられている。とりわけ『夷酋列像』は、その一見写実的な筆致と裏腹に、むしろ高度に政治的な作品である。

例えば、現実の蝦夷錦（清朝の官服）は、前身頃をボタンで留める構造となっている。ところが、イコトイの姿にもみられるように、ここで描かれたアイヌたちは、蝦夷錦の前身頃の左側を下に、右側を上重ね合わせて着用している。いわゆる「左衽」（左まえ）である。衽は着物の前身頃に縫い付けた細長い布のことで、左衽は右側の衽を上に出す合わせ方となる。これは古来、中国で夷狄の服飾とされた習俗であり、日本でも、新井白石の『蝦夷志』（1720（享保5）年）でアイヌの服飾は「左衽」とされて以来、和人の表象するアイヌは左衽が決まりであった。これは、現実のアイヌの文化とは無関係に、和人が中国の思想に基づいてイメージした、未開・野蛮のスティグマであった。

要するに松前藩は、アイヌを「未開・野蛮」かつ（それゆえに）「力強い」人々というイメージでコーティングし、併せて中国やロシアとのつながりを強調することで、そのようなアイヌを従属させている自己の力を誇示しようとしたのである。このころ、幕府では蝦夷地の直轄策を含むいくつかの選択肢が検討され、松前藩の転封（国替え）も想定しうる状況となっていた。こうしたなか、松前藩としては、中世以来の統治実績を強調し、松前藩でなくてはアイヌを統治できないことを示す必要があっ

た。「異容」「威容」を極度にデフォルメした『夷酋列像』の筆致は、そうした政治的事情を背景としていた。

しかし、1799（寛政11）年、幕府は東蝦夷地の幕領化を断行する。そして、日露関係の悪化のなか、1807（文化4）年には松前と西蝦夷地（当時はサハリンを含む）も直轄地となり、松前藩は奥州伊達郡の梁川9000石に転封される。蝦夷錦やロシア製のコートなどに見る、アイヌと外国とのつながりの強調は、かえって幕府に警戒心を抱かせ、皮肉にも幕府が蝦夷地に本格的に進出するきっかけを作ったともいえそうである。

ところで、クナシリ・メナシの戦いの際、ツキノエらは決起した同胞たちに投降・出頭するよう説得にあたった。松前勢は当初、助命を条件に出頭を求めたと推測される。37人の処刑はその約束を反故にするものであった。そして、処刑された中の一人には、ツキノエとチキリアシカイの子（セツハヤフ）がいた。チキリアシカイは『夷酋列像』に描かれた唯一の女性であるが、その陰鬱な目、怒りとも苦しみともとれる感情のにじむ表情はとりわけ印象に残る。こうした波響の表現には、あるいは波響の内心の葛藤、良心の呵責が込められているのでは、との推測もあるが、その真相に迫ることは容易でない。

〈参考文献〉

- ・五十嵐聡美（2003）『アイヌ絵巻探訪—歴史ドラマの謎を解く』北海道新聞社
- ・岩崎奈緒子（1998）『日本近世のアイヌ社会』校倉書房
- ・川上淳（2011）『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』北海道出版企画センター
- ・下山忍（2018）「『アイヌ人物屏風』との比較を通じた『夷酋列像』の教材化について—「地理歴史科指導法」の実践から」『東北福祉大学教職研究 2017』
- ・田端宏（2005）「近世のアイヌ社会 イコトイ「豪強」、悪党」そして「カムイ」」『平成16年度 普及啓発セミナー報告集』
- ・北海道博物館編（2015）『夷酋列像—蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界』「夷酋列像」展実行委員会、北海道新聞社